

特集▼いないのが残念ないきもの図鑑

ワニザメはワニかサメか？

いきものが残念な
いきもの図鑑と称して

縦横無尽に論じるワニザメ党

このところ、若者代表として登場願っているワニザメ党のメンバーは、皆、京都学園大学大学院で人文地理学研究室に属して人文地理学・歴史地理学を修めた修士たちである。地理学徒がなんでUMA?と思われるかも知れないが、彼らの論文の題名を見てもらえば少しは納得できるかも知れない。

ワニザメはいかに 白兎の皮を剥いだか?

堀田 穂
京都先端科学大学名誉教授

さいわい手元に、ちょうど彼らの修士論文をまとめた研究成果報告書「古代的世界觀を記憶する景観の歴史地理学的研究」（研究代表・佐々木高弘、二〇二一年三月）があるのでワニザメ党の仕事ぶりを一瞥してみよう。まず中山勘太郎「伝承された古代の呪術的防衛と渡辺党のネットワーク—茨木童子伝承を中心に—」。そして九五式石井「常陸國の神話的世界觀に関する歴史地理学的研究」、磯ちゃん「近世城下町の呪術的防衛システムに関する歴史地理学的研究—大分県中津市中津城下町を事例に—」いずれもベンネームで失礼するが本名を知りたければ、この報告書をご覧いただきたい。この特集に協力してくれている他のワニザメ党員の論文もこの報告書に収録されているので、それも紹介しておこう。夜刀

三つの領域を交差する関係性の空間について、「岡晴明」「小浜・福井城下町の尻的都市プランニング」中山・石井・磯ちゃんの三人は学部から同期で、夜刀(やつ)が後輩で、岡がさらにはその後輩となる。

いないのがざんねんなワニザメ

彼らに特集「いなのがざんねんなきもの図鑑」をまかせようと考えたのは、「学校の怪談」特集ですでに判明していたのだが、実によく自分の子ども時代のことを対象化して語ることができる、といふことによる。これは単に記憶力が良いとかいう問題ではなく、何かに抵抗しつつ成長した証しなのだろうと思える。

特集の企画書に当方が書いた文言を再収録すると、「ネッシー」や「ツチノコ・雪男」に河童・人魚「シーサー」・モケーレ・ムベンベなどのUMA（未確認生物）。現在は実在の動物として知られるオカビも、もともとは原住民の伝説上のUMAであったのが、二〇世紀に発見されたのだった。

そもそもわかれらん環境に棲息するのがUMAであつて、わけのわからぬ環境や、世界の果てが地球上から消えつたことが、人類にとって、そして子どもの育ちにとって危機なのではないだろ

かしくないという「秘境」意識が東京の特撮映画制作者にはあつたとすることがわかる。これは人文地理学的な側面をたいへん多く持つた問題なのだ。未知はよいのだが、知らうとも知らない無知が恐怖で恐怖付くこと、ヘイド、差別的言動にすぐさま陥つてしまふことの明證である。怪談・妖怪伝説大好きで恐怖したことへのグルメであるワニザメ党には、学問以上に感覚的に受け入れられないであろうということ、これも起用に結びついたのだ。

ここで、伝説や神話において、人が狐や蛇と交わつて子を産んだりする異類婚嫁譚が、彼らの研究にも大いに関わっていたことを述べておこう。古い所では、海神の娘、豊玉姫が陸上の神と婚嫁し、子を産むことになるが、決して覗かないように夫に言ひ含める。もちろん覗くと恐ろしいワニザメがのたうでていた。恥辱を与えた姫は子を残し海原に帰つてしまつという有名な神話がある。

この神話には、それまで小さな共同体、村で辛うじて自然に対峙していた時代の、村から外の世界への恐怖心が反映されているようだ。近親婚が生まれる子どものあまり良い影響を与えない、ようやく気が付き始めたころの人類の記憶だ。村から離れた遠くの婚嫁が嫁かを迎えるべきだが、どうにも恐ろ

しい、という葛藤の名残ともいうべきものであつた。

トリックスターが人類に火をもたらす

恐怖は人を未知に向かわせるか、無知に驅り立てるかで正反対のエネルギーになるようだ。サバカルチャーややはりその両面を際立たせる。例えば原発事故の直後、ハリウッド版「ゴジラ」が原発事故から始まる。とても国内ではこんなインポートは不可能だつたろうが、印象や感想の定着としては貴重なものだつたとしか言いようがない。

ということで、失敗を恐れず、未知に向かつてこれからもワニザメ党ガンバレ!とエールを送り童。磯ちゃんは某観光協会職員にめでたく就職し、河童の観光に力を入れ、中山もそれなりのようだが、石井は無職を誇っているらしいので、これを読んでももしろいと思った方はぜひ次の仕事を与えてやってくださいとお願ひしておきます。

何だこの題名と見出しあは!と怒った方、ワニザメ党のインターネットラジオを聴くと解ります。よろしく。

【因幡の白兎】世界の類話として相應（「俗民議義・異#12」
<https://youtube.tpsIRgJUjo>

うか？かつて怪獣映画ではモスラやキングコングは南海の孤島からハランに至つては飛驒の山奥（！）から現れた。まだ人々の心にわけのわからん場所の生々しさと恐怖があつたのである。

現代的課題に即してみれば、生物多様性や多文化主義も、ぎりぎり差別と裏腹の所に位置しているということを理解しなければ、ただのお題目にすぎない、ということではないだろうか。

ここで訂正。ハランが飛驒の山奥からと思い込んだのが、ウイキペディアではどうも東北の北上川上流の、伝説の怪物・婆羅陀鬼山神をあがめる岩屋部落になっていた、当方の記憶違い。更に貴重なのは、「一九八〇年代に東宝から発売されたVHSビデオでは、部落に関する「日本のチベット」と呼ばれるシーンがあった。差別的表現にあたる台詞のあるシーンがカットされていた。」

という証言が記されていてことだ。もつとも今となつてはチベットの人々が聞いても「チベットが何か？」となるだろうけれど。

白兎はトリックスター？

誤りは当方の責任で、ワニザメ党には関係ないが、一九五八年当時、北上川上流は怪獣が登場してもお